

NPO

栗原市

生きる力のヒントはかつての日本文化の中に。 自然の猛威と恵み。

呉地 正行 日本雁を保護する会 会長

取材日 2011.6.25

ガンは古来より日本国民に親しまれ、近年急速に全国からその生息地が減少した。「雁」という文字は人（イ）と鳥（佳）がひとつの屋根（厂）の下に共生している。この文字に示された関係を実現するために、冬の田んぼに水を張り、新たな雁の生息地と渡りのルートを復元すると同時に、雁と水田農業との共生を目指す活動に力を入れている。

3月11日 14時46分

北海道北部・天塩（てしお）町には道内で2番目に長い「天塩川」がある。ここはシジミが地域の産物で、川や湖でシジミ漁が行われていた。春や秋には「オオヒシクイ」という雁が渡ってくる中継地でもある。ラムサール条約登録湿地の潜在リストにも載っている場所だが、地元の人にはオオヒシクイを資源だとは思っていない。オオヒシクイの重要な生息地となっている旧河川に昨年シジミのために大量に砂を撒いて、ガン類や、水鳥達らの食物にもなっているマコモやヒシなどの水草に影響を与えるという出来事があった。地元の人にオオヒシクイを大事にもらうためにはこの鳥を地域の資源と思ってもらわなければいけない。そこで、漁業者、地元自治体、各分野の専門家、北海道開発局などが集まり、地域資源のシジミと雁の共存をめざす勉強会を立ち上げた。その第1回目が3月10日に開催され、会議に参加した。翌日、雪に覆われた美しい利尻島を眺めながら稚内へ移動し、羽田行きの飛行機に乗った。ちょうど宮城県から福島県の県境に飛行機がさしかかった時、飛行機が急に旋回を始めた。事前にアナウンスも入らなかった。しばらく経ってから大地震が発生したため羽田空港が閉鎖され、上空で待機をするとアナウンスがあり、長時間上空で旋回していた。結局羽田には着陸できず、仙台、花巻、三沢の上空でも待機したがどこも閉鎖され、計3時間程のフライトを過ごした後、千歳空港に降りた。その時点では大地震があった、という情報しかなかったが、空港のロビーでふとテレビを見ると、北海道の鶴川に津波がきて車が流されている映像が映し出されていた。これはただ事ではない、早く帰らなければと思った。携帯電話には自宅の妻から「地震大変です。みなめちゃんちゃです」というメールが届いていた。何回電話をしても通じない。陸路で帰ろうと思ったがJRは全面運休、テレビを見たら函館駅が浸水している様子が映っていた。その日は札幌に泊まり、翌日もう一度札幌駅に行ったがやはりJRは全面運休



だった。そこで千歳空港へまた戻ったが、すでに人であふれていた。運よく羽田行きの臨時便に空席があり、10時30分頃千歳を飛び立った。北上川沿いを南下し、宮城県の南部からは海岸より少し内陸寄り、福島では海岸沿いを飛んだ。とても天気が良く、下を見ると海岸沿いの地形が大きく変わっているのがよく分かった。堤防が切れて水が流れ込んでいたり、あんなに多く海岸沿いに湿地帯なんてなかったはずだというくらい田んぼはすべて水に覆われ、どこもかしこも地形が変わってしまっていた。ただ事ではないと感じるには十分だった。

家に戻るまで

早く若柳（栗原市）に戻りたかった。その頃には携帯電話が被災地域以外へは通じていたので、東京に住んでいる息子に連絡し、東京から仙台までのバスのチケットを確保してもらっていた。ところが東京に着いた頃には、道路の安全が確保できないという理由で運休になってしまった。東北新幹線はもちろん、北へ向かう他の在来線もみな運休だ。息子のアパートに滞在し、頻繁に津波の映像を流しているテレビを見ながら交通情報を収集した。14日に上越新幹線が動いていると知り、まずは東京から新潟へ移動し、バスで仙台へ戻ってきた。

問題だったのは仙台から若柳までの移動だ。公共交通機関は全く動いておらず、車はガソリンが手に入らないため、若柳まで往復できる仙台的友人になかなか出会えなかった。幸い送ってくれるという友人が見つかったため、15日の夜に暗黒の若柳にたどり着くことができた。国道4号線は停電のためにほとんどの信号が消え、真っ暗で、通り過ぎるのは自衛隊の隊列ばかり。とても現実のものとは思えなかった。

真っ暗になったので星はとてもきれいだった。同じ場所でも環境が変わるとあれだけ違うものになってしまうのかと、これまでの生活がいかに不自然だったのかを思い知った。

「持続可能なもの」を見直す

電気、水、ガスが止まり、何も使えなくなった。特にオール電化の家では水洗トイレの水も流せない、トイレのふたもあけられない。いかにハイテクが脆いか、便利さが持つ危うさを嫌というほど実感させられた。

家では障子やふすまが平行四辺形にひしゃげて破け、明治時代当時の書きつけを貼ったふすまの中身が見えていた。いろいろな物を見るにつけ、これはただ事ではないということが実感として押し寄せてきたと同時に、日本文化の見直しをさせられた。かつての持続可能な生活から、効率性や利便性を求める中で置いてきてしまったものが、震災の片づけをする中でいろいろと出てきた。ローテク・ハイセンスこそがこれからの生き方だと思う。今までは古い物は価値がない、時代遅れだと言ってどんどん処分してきたが、古い物はそれだけ長持ちしてきたということでもある。これまでの社会は「効率性・経済性」を最も重要視してきたが、これからは「持続可能なもの」にプライオリティを置きかえることが必要だ。そのような視点で見れば、古い物や仕組みはそれだけ長持ちしてきた証で、長く生活していく上でこれらを積極的に残し、活かして行くことは不可欠だと思う。自然の災害は必ず起きる。その中でも生き抜ける、生きる力のヒントはかつての生活の中にあった。今回の震災はそれを見直す良い機会となった。

被災地の記録を残そう

私の住む栗原市は、今回の震災で最大の震度7を記録した。自然災害として津波については頻繁に報道されてきたが、内陸の地震被害の報道はほとんどされていない。栗原市の中でも若柳の被害は最もひどく、栗原市で被災した住宅の65%程が若柳に集中している。私が住んでいる区画では57世帯のうち30世帯が赤紙を貼られ、そのま

までは住めないような状態となった。我が家もその1軒で、住家だけでなく、4つの蔵を含むほとんど全ての建物を解体しなければならなくなった、これも含め内陸被災地の現場でしかわからないことをできるだけ記録しようと意識している。

震災を振り返って

日本が欧米化する中で、もともと持っていた自分達の良さを捨ててきてしまった。今まで物質的な豊かさを求めて便利な生き方をしてきたが、それはとても危うく長続きはしない。考え方を根本的に変えなければいけないと多くの人が感じたと思う。生きていく上で何が一番大切なのか。原点に立ち戻ってもっと長持ちするライフスタイルを考えていかなければ、これから先の未来は描けないと思う。

日本は長い歴史があり、かつての文化の中で育んできた長持ちする仕組みがたくさんある。例えば世界の寿命の長い企業は日本の企業が圧倒的に多い。室町時代から続いている企業もある。日本は文化的に長続きできるようなノウハウや風土を持っている。それを再評価し、これからの時代に活かすことが必要だ。日本の文化、伝統を日本人自身が評価し、誇りを持って社会全体で活かして行き、価値の基準は変えなければいけない。

人間は自然に対して管理しよう・支配しようという考えを持って傲慢に接してきた。これは欧米型の発想だ。もともとのヤマト言葉の中にnatureを意味する「自然」という単語はなかった。日本の場合、自然と人間は一体化していて、人間も自然の一部だと考えられていた。それは



栗原市若柳地区

いかに人間と自然が一体化しているかということ象徴している。「自然」という言葉は明治頃に欧米文化が入ってきたことによって作られた単語だ。

原発や遺伝子組み換えのように、技術的には可能だがその影響が社会全体に及び、一度問題がおきると人間が管理できない領域には立ち入ってはいけない。またこれらの問題を科学者の良心だけにまかせるのではなく、科学技術倫理に基づき、社会全体で監視・管理できる仕組みを作り上げる必要がある。

エベレストはもともと海の底だった。それが今や8千mを越える山となり、頂上付近から太古の海に分布していたアンモナイトの化石が見つかる。地球ではそうした変化が起きてきた。人間の力はどうやっても自然には太刀打ちできない。そのことを改めて肝に銘じることが必要だ。どうすれば自然の猛威をかわしながら、その恵みを受け続けることができるのか、そこに知恵を絞らなければならない。大地は我らのものではなく、我らが大地のものなのだ。

行政

不眠不休の対応、震災の大きな爪痕。

大崎市

大場 宏昭 大崎市民生部環境保全課主査

取材日 2011.6.28

大崎市は広大で肥よくな大崎耕土を有する一大穀倉地帯で、世界の登録湿地の中で唯一水田を冠したラムサール条約湿地「蕪栗沼(かぶりぬま)・周辺水田」がある。地域の宝を次代につなぐため「マガンの里推進プロジェクト」や、地域の小中学生に環境教育を行う自然観察バス「マガン楽園号」を運行するなど、地域全体で環境活動に取り組む。

3月11日 14時46分

地震発生時は市役所にいた。携帯電話に緊急地震速報が入ったのですぐに席を立った。小学生の時に宮城県沖地震を経験しているので、どうしても地震は怖いという印象がある。宮城県沖地震は、近い将来かなり高い確率で発生すると言われていたので、大きく揺れた瞬間に「これは宮城県沖地震だ」と思った。立ちあがったとたんにものすごい揺れとなったが、なんとか1階まで駆け降り外に出た。1978年の宮城県沖地震とは比較にならないほどの凄まじい揺れだった

市役所のすぐ近くには小学校があり、下校途中の子どもたちがあまりの揺れに道路にしゃがみこんでいた。すぐさま、コンクリート塀などの倒壊の危険に対する注意を呼びかけた。近くの古い蔵が音を立てて崩れた。市役所の建物自体はひびが入ったものの、幸い大きな被害はなかったが、市中心部へ目を向けると、建物被害が大きく、津波被害が甚大だった沿岸部だけでなく、内陸部の大崎市にも非常に大きな爪痕を残した。

直ちに災害対策本部が設置され、病院の入院患者の安否確認や、災害協定を結んでいる店舗等へおむつや毛布の調達に走ったが、店舗も非常に大きな被害を受けており、毛布が入手できず、停電で真っ暗闇のなか、日用品の調達がやっとという状



態であった。直後は災害対策本部の仕事でしばらくの間帰宅するのは深夜に及んだ。その後、環境保全課で倒壊家屋等の震災廃棄物処分の業務を担当し、災害マニュアルに基づいてゴミの一時保管場所の確保や震災廃棄物搬入の受付業務を行った。4ヶ月経過した現在でも、震災に関わる業務がほとんどで、通常業務はまだできていないというのが現状である。

しばらくの間水道、電気が復旧しなかったこともあり、普段いかに便利な生活をしていたのかということを実感した。家族が全員無事だったということが救いだが、沿岸部の方々のことを考えると